［別紙２］

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名　瀬戸屋 希

本研究は、入院中の統合失調症者を対象とした心理教育プログラムの効果が、より大きく見られたクライアントの特徴、すなわち心理教育に対して高いニーズを有するクライアントの特徴を明らかにしたものである。特に、アウトカムの指標として主観的評価尺度を含めた幅広い指標を用いて、クライアントのニーズ・属性との関連を検討した。

本研究では、全国８カ所の医療機関で実施した心理教育プログラムの無作為化比較試験に参加した統合失調症者 148 名について、入院時点の属性変数・ニーズ変数と退院 9 カ月後の改善度（アウトカム変数）の関連を検討した。ニーズ変数には、症状得点（PANSS）に加えて、知識（KIDI）、病識（IS）、プログラムへの参加準備性（RPS）、地域生活に対する自己効力感（SECL）、生活満足度といった主観的指標を用いた。アウトカム変数には、ニーズ変数の変化度（改善度）ならびに再入院の有無を用いた。

まず、コントロール群に比べて介入群で有意に改善したアウトカム変数を特定し、次に介入効果の見られたアウトカム変数について、介入群の中でより大きな改善を示した者の特徴を検討した。最後に、複数のアウトカム領域にわたり改善した者の特徴を検討した。

主要な結果は下記の通りである。

1. 入院中の心理教育の効果を、共分散分析を用いて介入群と対照群で比較した。その結果、陰性症状の改善、知識の獲得、病識の獲得、参加準備性の向上の４つのアウトカムにおいて、介入の有意な効果が見られた。
2. 介入効果の見られた 4 つのアウトカムの改善と、関連の見られた属性変数・ニーズ変数を検討した結果、各アウトカムはそれぞれ異なる組み合わせの予測因子と関連していた。特に、各アウトカムの入院時の得点が低いことは、その指標の改善に関連していた。
3. 陰性症状の改善には、入院時の入院時の陰性症状が重篤であることが関連していた。知識の改善には、入院時の知識が低いこと、陰性症状が軽いこと、総合精神病理症状の重篤であることが関連していた。病識の改善には、入院時の病識が低いこと、過去の入院回数が少ないこと、陰性症状の軽いこと、総合精神病理症状の重いこと、自己効力感の低いこと、生活満足度の高いことが関連していた。参加準備性の改善には、入院時の参加準備性の低いこと、知識の低いこと、病識の高いことが関連していた。

4. 幅広い改善の見られた対象は、改善の範囲が限られていた対象に比べて、年齢が若く、罹病期間が短く、入院時の陽性症状、陰性症状、総合精神病理症状が重篤で、知識・参加準備性が低かった。
5. 幅広い改善に最も関連していた属性・ニーズ変数は、入院時の低い知識と短い罹病期間であった。

以上，本論文は，統合失調症患者に対する心理教育の効果と患者のニーズとの関連を、多面的な指標を用いて検討しており、その結果をニーズアセスメントという視点から考察した点で独創的である。また、心理教育に高いニーズを持つ集団像を描いたことは、個別のニーズに基づいた心理教育の提供や、心理教育のガイドライン開発に示唆を与えるという点で、有用性をも兼ね備えており、学位の授与に値するものと考えられた。